

練習問題 4 (財市場)

問 1

消費の理論に関する記述のうち、妥当なものはどれか。【国家 種・平成9年度】

- 1 デューゼンベリーの相対所得仮説においては、個人の消費活動は、現在の所得だけではなく、将来に達成したい消費水準に依存して決まる。したがって、この仮説の下では、短期的な所得の減少が生じた場合、所得の減少額以上に消費は減少する。
- 2 クズネッツ型の消費関数によると、所得の増加により平均消費性向は低下する。しかし、ケインズによる長期の時系列データの分析によると、平均消費性向は所得の増加に対して、ほぼ一定であることが示されている。
- 3 フリードマンの変動所得仮説においては、自己の所得獲得能力により決定される恒常所得よりも、景気変動のような自己の所得獲得能力とは独立の一時的要因によって決定される変動所得により、個人の消費活動が決定される。
- 4 実質資産の増加が消費の増大をもたらす場合、実質資産の増加は LM 曲線を左方にシフトさせ、所得や雇用の均衡水準を減少させる傾向を持つ。この効果をケインズ効果という。
- 5 モディリアーニらが唱えたライフサイクル仮説においては、個人の消費活動はその個人が一生の間に消費することができる所得の総額の大きさにより決定される。この仮説は、遺産動機や寿命の不確実性を考慮し、より現実的なモデルにすることができる。

4 は間違い。

問4

マクロ投資理論に関する次の記述のうち、妥当なものはどれか。【地方上級・平成5年度】

- 1 加速度原理では、投資は生産量の変化に比例し、望ましい資本ストックの量とは無関係に投資が変化する。
- 2 新古典派の投資理論では、資本のレンタルコストとは独立に望ましい資本ストックの量が決定される。
- 3 資本ストック調整原理によると、望ましい資本ストックの量は現実の資本量に依存して決定される。
- 4 ケインズの投資理論によれば、利子率が資本の限界効率を上回る限り投資が行われる
- 5 トービンのq理論によると、企業の株式総額が企業の資本設備などの再取得価格を上回る限り投資が行われる。

問5

投資の変動と株式市場の変動のつながりを説明する「トービンのq」に関して最も適切なものの組み合わせを下記の解答群から選べ。【中小企業診断士】

- a 設置済みの資本の市場価値を設置済みの資本の再取得費用で除した値。
- b 資本の現在の収益性を反映している。
- c 将来の期待される収益を反映している。
- d 「トービンのq」が1より小さいと、新規投資を行うことで企業価値が増加する。

- 1 aとbとc
- 2 aとbとd
- 3 aとcとd
- 4 bとcとd